



Title	加州における日本人
Author(s)	中島, 九郎
Citation	北海道大学農經會論叢, 15, 143-155
Issue Date	1959-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/10778
Type	bulletin (article)
File Information	15_p143-155.pdf



[Instructions for use](#)

加州における日本人

中 島 九 郎

わが国よりするアメリカ大陸への移民の波は、前世紀の末頃から太平洋岸のカリフォルニア目がけて、ドット押しよせた。アメリカ西部の宝庫たる加州の土地大資源は、秀でたるわが農業移民の手で開拓され面目を一新するに至つた。

しかし日本移民の数が増すにつれ、日本人の同化問題や サンフランシスコ 桑 港 学童分離問題や写真結婚問題や排日移民法の問題や、今度の太平洋戦争によるアメリカ在住日本人の奥地への抑封問題など、幾多の問題が絶間なく加州に発生した。従てわが国民として最も深い関心をよせたこと、アメリカの州内ではこの州の右に出るものはない。かように在加日本人はしばしばイバラの途を歩ませられはしたものの、他の半面には輝やかしい部面もあつた。即ち第一次大戦の終熄に至るまで暫らくの間は、彼等加州在住日本人の物的人的各方面における活躍ぶりは誠に目覚ましいものがあつた。

わたくしはその終戦の直後に留学のため渡米し、加州にも暫らく滞留して彼地の経済問題や移民問題を研究した。その頃桑港一流の新聞で、創立五十五年の旧さをほこるサンフランシスコ・クロニクルが、一九二〇年一月十四日号を西部発展号 (Western Expansion Edition) と題して増刊紙を発行した。特に日本に關係の深いところは「加州における日本人」と名づけ、日本人によつてなされた各方面に跨る加州の発展を広く世界に紹介したその部分であり、在米日本人の先覚者をはじめ、ゆかり深い地元米人の執筆にかかる堂々十二

頁からなるものだ。エネルギーシユな日本人の勇躍の姿が紙面の隅々にしみ渡つていた。

そのころ、丁度自分も桑港附近でこの日の特集新聞を熟読し啓発感奮するところが多かつた。それから早くも四十年の歳月が流れ去り紙端がマメツして文字の判読に悩む個所も現われ出した。今の内にこれを日本文に直して整理しておかないならば、そのころの貴重なる日米関係の知識が少なからず日本人の目から遠ざかりはしなないであらうかと憂うるあまりに、ここにその大略を訳して見た。ただ読者の理解をたすける程度に補註を加えたところはある。この訳文は全紙の完訳ではないが、訳した個所についてはなるべく途中を飛ばさずに纏めておいた。また原文の忠実な逐語訳につとめた積りである。ではこれから始めよう。

加州における日本人の移住と在住日本人

(本項は「世界政治の中の日本」や「日本と世界平和」やその外の書物の著者としてそのころ光つた河上清(A. K. Kawakami)の寄稿にかかるとのである。)

アメリカ合衆国への日本人移住はこの国の移住事務局の報告書の中に初めて現われたのは一八六六年のことで、この年アメリカへ七人の日本人が渡来した。その後一八八五年までは日本人渡航者の数は殆んど殖えなかつた。然るに一八八四年にアメリカ国会は支那人排斥法を通過させたところ、これが日本人労働の導入を活発にする一つの機縁を作り出すことになつた。即ち加州の大地主は好条件を以て日本移民を極力迎え入れるようになった。かようにして一八九一年に日本人の移民は一、三六人に達した。この頃一つの新要素が太平洋岸における経済情勢の中に加わり日本人労働の雇傭面を拡大するに至つた。それは西部地方に諸鉄道の建設が始まると日本人は好適の鉄道工夫として大歓迎を受けはじめたからだ。

一八九〇年代の末、ハワイがアメリカに合併され、一九〇〇年になると始めて日本人のハワイ移民の数が報告に載るほどになつた。この年日本人渡米者の数は一二、六三五人であつたが、その大部分ははじめハワイにやつて来たものだ。次表は一九〇二年にはじまり一九〇七年の紳士協約締結の年に至るまでの間に、アメリカ大陸ならびにハワイに渡来した日本人移民の数を示すものだが、同時に同期間におけるヨーロッパ移民の数字をもつけ加えておいた。(中島註・この表は筆者において省略)表の示す通り、アメリカ大陸への日本人移民は大したものではなく、大部分は、ハワイへやつて来たものだ。けれどもハワイへ渡航した日本人の多数は結局はアメリカ大陸へ流れ移

つた。かようなわけで太平洋岸の抗議はとうとう紳士協約の締結にまで持ち上るようになったが、この抗議の真のネライは、日本人移民がハワイ諸島からアメリカ本土へもぐり込むことに対する警戒心であつた。

紳士協約に関する盛んな論議

日本人労働者をアメリカから排斥しようとする一九〇七年のいわゆる「紳士協約」は正式な条約の形でも協約の形でもなかつた。この紳士協約という術語は、要するにアメリカ國務省と当時の日本大使との間に取りかわされた幾つかの非公式の覚えがきノートに過ぎなかつたものだ。この協約を要約すると次のようだ。(中島省略)

紳士協約は労働者の渡来を喰い止めた

この協約を基礎としてルーズヴェルト(セオドル)大統領は一九〇七年三月十四日に一つの命令を發して、メキシコ、カナダまたはハワイ行きの旅券を持ちそこからやつて来たところの日本人または朝鮮人の労働者がアメリカに渡来することを禁止して仕舞つた。この行政命令を実施するため、通商労働省は一九〇七年三月二十六日に次のような通牒を發した。(省略)

違法の入国者は逮捕さるべし

……若しも日本人または朝鮮人の労働者が、アメリカ大陸内に不正入国したことが露頭した場合には、その外国人は一般移民法に従い逮捕または尋問に服しなければならない。”

どんな具合に紳士協約が働きかけたか

アメリカ政府が日本人労働者の排斥を考へる場合に主に念頭においたのは、太平洋岸における諸事情であつて、甘蔗園が日本人労働を必要としたあのハワイにまで同協約を及ぼさうという考は、毛頭持つていなかつた。ところが日本政府は自分の創意イニシアチブと意ヴォリションにより、協約の適用をばハワイにまで拮げようと決心した。そしてハワイ向け旅券をば、以前ハワイの住民であつた日本人労働者かまたはその両親か妻子に限つて發給することにした。

機構が運用されるまでには時間を必要とした

この数字(省略)を見てよく事情を知らない人びとは、移民排斥法は初年においては目的を達し得なかつたとの結論を下したが、るであろ

う。が、この結論は誤つておる。排斥法は一九〇七年三月に公布されたが、その施行上必要な準備を完了し、日本の協力（この協力は、その年の七月・八月頃までは、滑らかな運転を始めるという事は出来なかつたものだ。）を得るためには相等の日時を要したものだ。そういうわけで新協定は、その年の七月・八月頃までは、滑らかな運転を始めるという事は出来なかつたものだ。それ故に一九〇六年の七月から一九〇七年の六月に跨る一九〇七年の財政年度においては、日本人移民は新制度に依て殆ど影響を受けなかつたものと見ることが出来る。否それどころかアメリカにおけるこの年の大好景気は、日本から移民の異常なる多数を招き入れたものであり、それはヨーロッパからも同様な有様であつた。同年欧州からの移民は実に総数一、一九九、五六六人の多きに上りアメリカ移民史の記録を破つた。ヨーロッパ移民を膨脹させたと同じ事情が日本移民に対しても同様の影響を齎したものだ。

移民の激減

然るに一九〇七年の夏の半ばになると新制度（新政策）の効目が見え出した。日本は自ら渡米移民に対し有力な制限を加え始めた。かくて一九〇八年六月三十日に終る財政年度においては前年に比べ一四、四二三人の減少を示し、更に翌年度には三、四三〇人（註・原文の数字はこの通りであるが次行の内訳の合計と合わない）に減じた。——アメリカ大陸へ二、四三二人、ハワイへ一、九九八人——そして同時に反面七、三八二人がこの国を去つて母国へ帰つたので、ハワイおよびアメリカ大陸における日本人の数は三、九五二人に減つて仕舞つた。

日本人渡来者の近來の増加

紳士協約の結果アメリカ大陸への日本人渡来者は、一九〇八年から翌年にかけて前記の如くに減少した。然るに一九一一年以降次第にその数を盛り返して来たがそれは次の事実に基づくものとされる。

取引の増加は商人を招き寄せる

第一次大戦に基く米日貿易の激増は、勢い多数の日本の商家をしてアメリカに代理店を送り、サンフランシスコやシヤトルやニューヨークやその外のアメリカの主要都市に新たにオフィスを開設させることになつた。

誰れが、つまりどんな資格の人が労働者であるかを見分けることの困難な場合が時々存在する

……労務者と非労務者とを区別することのむづかしい場合が屢々出て来る。日本政府はよく調査の上で非労務者と信ぜられる者に限り旅券を出すのであるが、それでもアメリカ移民当局の判断によつては、この同じ日本人が労務者と認められることもあり得るし、またよくあり得ることだ……。

近頃写真花嫁（写真結婚 *Picture brides*）のことが盛んに話題になつて来た。アメリカに来る凡ての日本婦人が写真花嫁だと思つてはそれは大誤りだ。それらの婦人の中少なからざる者は、過去何年かの中に、アメリカ各地にオフィスを開いた商社に關係をもつ日本人の妻女である。そして多くの婦人はその夫が日本を去つてアメリカに来る前に互に結婚をしており、こんどは自分がアメリカにやつて来て夫と同居しようとするのである。そんなわけで多くの渡来婦人は写真花嫁ではないのだ。

写真花嫁の難問題

アメリカ大陸への写真花嫁の渡航者総数については自分は確たる資料を持合せていない。ただ一つの数字は一九一二年から一九一九年にわたる八年間合計五、〇七〇人の数字である。恐らく「写真花嫁」という言葉は誤つた称呼であり、それには解釈を必要とする……この結婚は日本政府にもアメリカ政府にも双方にとり法律的に有効と認められて来たものだ。多くの場合写真の交換は不要だ。当人の花嫁も花婿も同じ町や村に生れ子供の頃から互いに知り合つていたという場合が屢々あるものだ。……

一九一九年十月二十八日に、サンフランシスコのアメリカ日本人協会の役員会は次の声明書を發表して、写真花嫁の問題に關し日米兩國政府に依て恐らく取られるべき手段^{ステップ}をば予想した。その声明書を要約すると次のようなものだ。

日本人はアメリカの習慣になじむようにわれわれは希望する。

〃日本人協会の役員会の意見としては、アメリカ在住日本人の或階級の間に行われている「写真結婚」は廃止さるべきものだ。それはアメリカで承認されおる結婚の觀念にそむくばかりでなしに、日本人自身の高まりつつある理想とも合致しないからである。……過去何カ月かの間日本人協会の手により広く実行されて来たところのアメリカ化^{アメリカイゼイション}に対する熱心なそして心労の多い運動を通して、ここ加州における日本人は、写真の交換による結婚のやり方は、アメリカ人の理想と習慣とに一致しないものだとすることを呑み込んで来た。

写真結婚 *Picture-marriage* という言葉は全く誤つた名称である

“日本政府もまたこの写真結婚を禁止することは望ましいと考へつつあるものと本協会は諒解する。この事柄に関し日本政府の側から正式の声明の出るのを待つまでもなく、われわれは写真結婚を停止すべく適切な手段を講ずるように政府に要望すべきであるという結論に到達したのである。……写真結婚は一つの誤称であり、この言葉が外見上意味するようなそんな簡単なプロセスではないということを強調しなければならぬ。

“アメリカにおける日本人は結婚をすませて家庭生活に安定すべきである。……そしてかれら日本人が家庭生活に対して一度大いなる望みを示すようになって来て以来、飲酒や賭博やその他の彼等の間におけるこれまでの悪い習慣が非常に下火になり、日本人社会の道德水準が非常に改善されて来たのである。

“日本人が家庭生活に安定することの望ましいことについては何等の問題もあり得ない。それとともに彼等の家庭を構へることに對して、在來の日本人はその住んでいるアメリカの觀念や習慣に反する何事をも決して行つてはならないことをわれわれは強調するものだ。”

右の一文が起草されてから、日本政府はアメリカ大陸在住の日本人との結婚が写真の交換によつてなされた場合に、その婦人に對し一九二九年二月二十五日以降旅券の發給を差止めるであろうという声明を出した。日本政府によるこの自發的手段は、アメリカ及び加州との間の友好關係の維持促進に對する日本の熱意のほどをもう一度立証するものである。

加州に現住する日本人問題

ここでわれわれの注目を引く最初の事柄は加州における日本人の數だ。若しもセンサスが一九二〇年に完成の暁は、何人の日本人が加州や他州に存在するかを知ることが出来よう。それまでは一九一八年九月サンフランシスコの日本領事館でなされた加州在住日本人の近似數による外はない。それによると

男	子	婦	人
四一、八四二人	八四二人	一、二、三三人	一、二、三三人
十六才以下の男の子	七、八七七人	十六才以下の女の子	七、〇三一人

計 六八、九八二人

住民の半数以上は農業者である

加州在住日本人の総数六八、九八二人の中約三八、〇〇八人は農業に従事している。

日本人農業者に関する諸事情

在加日本人農業者に関し、二、三の点を是正する必要がある。先づ彼等は常雇農業労働者 (Farmhands) としてはアメリカ在住の日本人ばかり使つておるとよくいわれるが、それは真実でないということその点だ。近年多数の日本人農家は、日本人労働者と並んで白人労働者を使つておる。(中島註・自分も今から約四十年前加州の日本人農村視察の折に、白人労働者が日本人の大規模の小麦作農家に使われて神妙に働いている現場を目撃したことがある。)

日本人農場労働者の賃金は白人の仲間よりも却つて高いということは驚くべき事実だ。この違いの起るわけは、或種類の農作業では日本人の方が一段と能力が勝るからだ。仕事の種類が日本人に特有な熟練と能率とを敢て必要としないような場合には、日本人農業者はむしろ白人労働者を使いたがるものだ、その方が労銀が安いからだ。

ここ加州の日本人は^{フロンチア}辺境時代に存在しつゝある

日本人農業者は、その地方においてアメリカの銀行と取引をしておるのは顕著な事実だ。それなのに日本人農家は、本店が日本にあるサンフランシスコの邦人銀行から融資を受けておるその噂が、偏見をもつ人々や、よく事実を弁えない人々によつて立てられていながらそれは誤りだ。日本人農家は取引上正直で信用がおけるといふことは、農村地方のアメリカの銀行の保証するところだ。

日本人農家の妻女は夫と一語に畠の上で働くという非難の声がよく聞かされたものだ。或日本婦人は軽い圃場労働で夫の手伝をするといふことは否定出来ない。しかしこれはヨーロッパやアジアの旧国の婦人についても同じことがいえる。加州における日本人農家は今も尚開拓先駆者時代 Stage of pioneering に存在し、この時代に不可避的に経験されねばならないところの困難と忍苦を堪え凌ぎつつあるものだ。日本婦人が圃上労働で夫を援けつつあることは、この開拓苦難時代の一側面を物語るものに過ぎない。……加州における開拓先駆者時代の日本人農家の生活様式―住宅など―は快適な生活とは程遠い。これが日本人の最後の生活状態だと信ずる日本人は誰れひとりな

い、それどころか彼等は富を得るのみでなく進んで社会水準を高めようとする大望を抱いておる（註・最近北海道における開拓農民の生活水準の向上運動と比べよ）

ヨーロッパの移民でさえもが、アメリカの同輩に皮肉られたほどの見すばらしい状態の下に生活を営んでいたのは、まだそんな古い時代のことではないのだ。こういつたみじめな状態はヨーロッパ移民の生活の中から大部分は消え去つて仕舞つた。日本人が何が故にこれと同様な進歩の段階を登つてはいけないのかその理由は存在する筈がない。

（中島註・数十年前私が加州の日本人農村視察の頃でさえそこには生活向上のきざしが見え出していた。即ち住宅方面には未だ多く認められなかつたようだが、自家用自動車の激増となつてその一端が現われていた。或真夏の日サンフランシスコの犬飼商会の一店員（北大農学実科出の教子）の繰る自動車で州の首府サクラメント脇を流れるサクラメント川の堤防をドライブした際、向うから風を切つてやつて来る自動車という自動車は、殆んどが日本人農業者の繰る自家用車であつた。話は外れるが海洋的な温和な気候の桑港を立ち内陸の首府に向け急速力で走れば刻々に暑熱加わり首府に届くと街路には亜熱帯植物が茂り異国情緒に打たれた。）

一九一三年公布の外人土地法

加州における日本人問題を考える時は、一九一三年州議會で公布の外人土地法を思い浮べざるを得ない。日本人が加州内で農地をあまりに急速に買収しつゝあつたという理由で、州はかかる法律採用の止むなきに至つたものとされる。加州の統計官ジョージ・ロバートソンによると、加州の日本人は一九一三年に三三二農場その面積二一、七二六エーカーを小作していた。サテ加州の農地 *Farm lands* は一九一〇年のセンサスによると総面積二七、九三二、四四四エーカーで、内、改良地は一、三八九、八九四エーカーだ。して見ると外人土地法公布の時日本人は僅か加州の農地二、一六エーカーにつき一エーカーを所有したに過ぎない。……在加日本人に依て改良された土地の大部分というものは、アメリカの農場にとりては無価値か或は耕作しても不利益なようなそんなヒドイ土地であつた。けれども日本人農家の勤勉と忍耐力とはかかる土地を立派な農場につくりあげて仕舞つたのだ。

日本人がその勤勉と知識と能率とによつてかようなつまらぬ土地の真価を發揮する時には、その隣地の価値が無類に高まつて来る。この例はリビングストン (*Livingston*) やフレズノ (*Fresno*) やフローリン (*Florin*) （註・土地の人は不老林の漢字を当てて発音の上

からもあたりの日本人に親まれた地名だ) バット郡 (Butt county) などに見られたところだ。

濃々と風に飛び立つ砂土が日本人によつて手なづけられた

日本人が約十二年前始めてこの地(フレノ郡リヴィングストン)に姿を現わした際には、彼等は灼熱の太陽の下に土中の湿分を残りなく吸い上げて四辺に吹きちらす砂漠風に依て舞い上る砂以外の何物でもない土壌に直面したものだ。そこには人生をして生き甲斐あらしめるような何物も存在しなかつた。事実そこには人間の生活は不可能と信じられたものだ。十二年前にアメリカ人の一植民地がこの地に計画されたけれど、不良な条件と短期間闘つただけで消え失せた。隣人はこういつた、単に「フツ飛んで仕舞つたんだ」"Simply 'blew away'".
そんなわけで日本人がリヴィングストンに定着する積りだと公言した時には彼等に嘲り笑われた。しかしながら日本人は忍耐と勤勉に依り砂漠を変じて微笑する蔬菜園や見事な果樹園に切りかえることに成功した。この変化の一結果として、それまでは無価値と認められていた隣の砂畑も忽ち価値を高めるようになって来た。

アメリカ人のために米作 Rice industry に先鞭を着けた日本人

日本人がこの地方 (バット (Butte)・コルーサ (Colusa)・ユバ (Yuba)・サター (Sutter) 各地方) で稲の試作をやつた最初の者ではなかつたけれど、米作をして商業上 (營利的) に成功させたのは実に日本人であつた。アメリカの開拓先駆者はよろめきながら米作を放てきたのに、日本人は進んでこの事業に心魂を打込み、失敗や災厄に耐え忍んで行つた。日本人が米作の有利性を立証したので、アメリカの農業者は日本人先駆者の高価な実験と多大の失敗に鑑みながら、この先例を追い進めて行つた。今日では少くも十四万エーカー(五万町歩強)の米作地がそこに存在する、内日本人農家の間に約一万六千エーカーの稲作が行われているのである。

日本人はコウカシア人の嫌うようなそいつた農業の種類に従事する

サクラメント河の三角州地帯はもともと湿地で屢々汎濫の害を受け、永い間不健康と認められ、コウカシア人の農家に嫌われて来たものだ。この地方を有利な農業に開いてやつたのは外ならぬ日本人であつた。そしてこれらの土地を馬鈴薯や玉葱や菜豆や果実の能く稔るところに仕上げた。……日本人が加州内でサクラメント流域以上に良い農業成績をあげたところはどこにもない。取りわけ果実やイチゴや米の場合はそうだ。

日本人農家は白人農業と競争するものだとよくいわれて来た。けれども事情をよく調べる時は、日本人は白人農家が毛嫌いする様な種類の農業—腰をかめるような—toに従事していたことがある判る。次表はこれを証明するものだ。(中島註・表には二十種近い作物が取り上げられているが、その内から四種について、加州におけるその各作物の耕作面積に対する日本人の耕作歩合(%)を示すと下のようだ。苜蓿九一・八、セロリー八九・二、ビート(甜菜)五〇・一、米一〇・〇)

要するに日本人農家はあちらの農家と競争するものではなしに、却つて或種の農業をアメリカの農家自身が好まないことから来る欠陥を満たすものだと示すもので意識が深い。……加州の米作は東洋のそれと違う主なところは経営規模の点だ。アジアの水田では米は播種から収穫まで一人の手で取扱われ得るような小区画の中で作られる。ところが加州では米は何十エーカーの田地に栽培され機械で収穫され、モーターつきの強力なセベレーターで脱穀され、次にモータートラックにより精米場に運ばれるのだ。

日本人家族の出生率

過去十年間に日本人の出生は著しく殖えた。しかしこれは正常なものではなく、出生率はほどなく減るであらう。日本人移住者は当初妻を連れず単身であつた。しかし近年になると彼等は紳士協約の下に母国から妻女を呼び家庭を構へ出した。加州における日本人出生の突然の増加はかように自然の結果であつた。その上に彼地の日本人もまた死亡し行くであらう。統計によると五、八六〇人の日本人が一九〇八年と一九一七年との間に州内で死んでおる。(中島註・この高率死亡は新天地の苛烈なる環境の下に働き過ぎた一結果かも知れない。)

日本人はわれわれの農場を取り上げつつありとの米人の叫びは加州の実情を知るものにはコツケイだ。一九〇〇年から一九一〇年に至る十年間に加州の農場面積において八九七、五九七エーカーの減少があつたが、これは要するに農村地方から都会への人口大移動の結果であつた。

都市生活の魅惑 *Lure* というものはこ二十年、二十年の間に州の農業衰微の大原因をなした。加州の日本人農業者なる者は、かように若い世代のアメリカ人による農場放棄から来る農地のギャップの一部分をばうずめる役目を果たして来たものだ。

メキシコ国境からする密入国

元来日本政府はメキシコへの旅券を発給しないし、またメキシコ在住日本人の数は二、三千人に過ぎない。わが政府は日本人がメキシコから加州へ密入国を行う危険があるので、日本国民がメキシコに渡来するのを妨げようとして、大苦心を払つたことは次の事実でも判らう。

汽船会社は乗船を拒絶する

何年前か、リマ駐在の日本人領事がペルーの日本人でこれまでメキシコに渡りつつあるものあつたことを発見したので、彼は東京政府の訓令に基き日本の汽船会社（東洋汽船）に対しペルーからメキシコ港行きの切符を発売しないよう要請した。会社では日米間の友好関係を考慮して日本政府のこの無理な要求を受諾し、今まで過去何年もの間ペルーからメキシコあての切符を発給するの権利を自発的に停めつつあるのである。

法網をくぐる色んな手段が講じられた

ペルーの日本人は日本政府と汽船会社間の協定により彼等のメキシコへの脱国が喰い止められたことを知ると、今度は日本へ帰る積りだと公言し東京行き切符を求め始めた。勿論汽船会社としては故国に帰りたいと望む人に切符の発売を拒むわけには行かなかつた。けれども忽ち日本人中の若干の者は、汽船がサリナ・クルーズ *Salina Cruz* 港に碇泊した時に、その港からひそかに上陸を執行するといふことが露頭した。船長が万一上陸を妨げようとした時には銃口をつきつけてまで我を通そうとしたことも稀ではなかつた。日本政府はペルーからメキシコへのこの日本人不法移住をばどうしたら防ぎ得るやら途方に暮れて仕舞つた。メキシコ国境を越えての密入国の問題は日本政府の権力 *Control* 以外の事柄であり、総て合衆国の移民当局の監視を一層厳にすることに依て調制すべきものだと思われるが主張するわけはそこに存在するのだ。

日本人の花弁園芸家は沢山の立派な花を生産する

凡そ草花の栽培は日本人の特技であり金門港附近でよくこの特色を發揮した。桑港のセントアンヌ街の加州花市場に温室から花が運び出された際の早朝の華やかな光景以上にこの日本人の花弁園芸上の才能がクツキリ現われるものはない。パークレー（加州大学の所在地、大学の高塔から流れるチャイムは有名）には太平洋花卉会社が存するが、N・内藤は同社の中心人物であり市内で豪華な切花の裝飾事業に

専念しておる。

日本人の商人はサクラメントで繁昌してゐる

同市には食糧品や雑貨や農機具を扱う日本人商店が多く存在し、その内の津田商会は大商店である。店主の I・津田は今から二十六年前にこの地に來たが、生涯の踏み出しは或牧場 (Ranch) での労働であつた。ここで三年間働いて長にあげられ七年の後商会を作り今日に及んでゐる。

スタクトンおよびその附近の企業心に富む日本人により多くの荒蕪地が改良されて行つた

昨年中彼等日本人は四六、三二一エーカーを耕作したが、その大部分は玉葱と馬鈴薯作で馬鈴薯では約四〇〇万弗玉葱では三五〇万弗の収穫をあげた。ここは日本人がやつて來る迄は水につかつていたような荒蕪地であつたものだ。この方面における先駆者は牛島謹爾 (George Shima) であるが今では加州の重要人物の一人となつた。彼は微賤の地位から身を起し現在ではミリオネアであるばかりでなしに加州における財界の巨人の一人 (One of the financial giants) となつた。

牛島の成功は力關の結果である

牛島は二十五年前スタクトンに來り直ぐ農業を始めた。彼は周囲の事情を究めた末、その地方の土地は改良が出來させたら頗る豊饒な地所になるだろうとの結論に達した。それは諸川の氾濫水が何年もの間沃土を沈澱させたからだ。最初の問題は土地の排水であつたので彼は土地改良の事業を始めた。(北海道における新開拓農業の模範として最近急にクローズアップされて來た札幌近郊石狩河畔の篠津地区の大開墾事業と比べよ) その結果は今日加州内どこにも劣らぬ農業資源の一帝國にデルタ地方を築き上げた。この地方から産する馬鈴薯と玉蜀黍は實に世界到るところに積み出されておるのだ。(中島註・牛島は馬鈴薯王 (Potato King) と謠われ一頃牛島農場所産の馬鈴薯に依てニューヨークの馬鈴薯の價格が支配されたほどだ。)

モントレイ (Monterey) の日本人漁業は加州の資源に大貢獻をなす

モントレイからは毎日約一五〇隻のボートを繰り出し潜水大のエキスパートにより深海からアワビの漁獲をあげる。加州内の多くの都市―日本人の大集落を含むところの―の場合とは違ひここモントレイでは日本人が多数住む特別の集落というものを有つていない。ここ

の日本人は市内に散らばっているが、その多くは外見白人の上層階級の住いと区別のつき兼ねるような立派な家屋に住まっている。事実モントレイの日本人は、この町の緊密な (Integral) 大切な構成分子となっており、職業上や生活上に費す金高はこの町の商業資源の大部分を形作つておるのだ。

日本人の先駆者は営利的に成功した最初の田地を作り上げた大恩人である

米は前にも加州で他の実験者により作られはしたものの有利な栽培法を最後に発見したのは日本人だ。この方面において永く記憶さるべき人は R・高田 (力蔵)、K・生田、Jog 河原および T・安岡であろう。米作の前には、ビートや穀物や棉花やその他殆んどあらゆる種類の作物が試みられたけれど凡ては失敗に帰した。ところが思案の末或人が漸く米作を思いついた。高田はオクラランドで以前実業に従事して人望を有していたが彼は資力の及ぶ限り勇敢な農業実験者を引立てた。彼は稲の品種改良問題解決の鍵は生産費を引下げアメリカの労働条件を維持するところの大問題を意味するものだとこの断定を下し、煎じつめれば稲の収穫機の使用と米田の大規模耕作がその解決策だと考えた。加州の最大米作業者は高田が社長の加州米作会社であり約六、五八〇エーカーを経営し州の米収穫の約五%を生産する。会社は米の生産を良くする目的で絶えず改善と実験を行いまた収穫方法の発達を図りつつある。

なおこの記念考には記載漏れの日本人の名士がある。その一人は加州の葡萄酒王で文部省第一期留学生と噂された長沢鼎だ。私は或先輩とサンタローザの彼の邸宅を訪れ、芳醇な古酒を饗せられたことがある。アメリカに禁酒法が布かれドライとかウエットとか盛んに使われていた頃だ。また大養鶏場経営者の名を逸することは出来ない。北大出身の吉沢誠蔵はその人である。(昭三三・一〇・二五)